

Men and Women Who Were Seen through
Cross-Dressing(4) : Men in Cross-Dressing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤阪, 俊一 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/962

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



異性装から見た男と女(4) 女装の男たち

Men and Women Who Were Seen through Cross-Dressing(4)

Men in Cross-Dressing

赤 阪 俊 一

AKASAKA, Shunichi

はじめに

前稿まで女による男装を扱ってきた。女による男装は緊張度の高いものであったことが特徴的である。女教皇ジョーンは女であることが判明したとき民衆に殺されたし、また、前稿でみたごとく、物語中のサイレンスは大団円になって男装を解くことができたものの、男装の最初の目的であったコーンウォールの領有維持は果たされず、コーンウォールは王領になることが示唆されている。サイレンスは男装を個人的に非難されることはないが、結局男と等しい生活をすることは拒否され、男の従属的地位に甘んじることが決定されてしまうのである。女性聖人たちも、生きていくうちに社会から認められることはなく、死んだあと、男装を剥ぎ取られて、ようやく業績が認められたのであった。

こうした緊張度の高い、そして最後には破綻することを運命づけられた男装に比べて、男による女装はどうであろうか。聖書によって禁じられているのは、女による男装だけではない。旧約聖書でははっきりと男による女装も禁じられているのである。¹ところが実

際は女装の場合と男装の場合でかなり違っているようなのである。

1 女に接近する手段としての女装

中世フランス語の韻文体で書かれた物語、『サイレンス』においては、王妃の付き人としての尼僧が実は女装した男であり、彼は姦通者として処刑された。² この物語の中では、男は女装することによって男子禁制の場に入り込む。つまりここでは性的な倫理逸脱を意図しているとの前提で女装がとらえられているのである。これと同じ見方での女装の例が、トゥールのグレゴリウスに見られる。そこでは、次のように語られている。³

そこで列席の司教たちは教会の内陣に座ったが、かれらの前にクロティルデがあらわれ、女子修道院長に向かって多くの悪口と非難をあげせた。すなわち彼女は、女子修道院長が修道院に男をもっており、この男は婦人の衣服をまとい婦人として通っているが、男子であることはもっとも明らかに示されており、かつかれは女子修道院長に不断に仕えていると主張し、かれを指で示して、「ほらこの男で

キーワード：中世、異性装、ジェンダー

Key words : Medieval Ages, Cross-Dressing, Gender

す。」と言った。かれはわれわれが述べたように、婦人の服ですべての人びとの前に立ち、自分は男の仕事が何もできないのでそれ故こうした服装をしたと言った。

ここで語られているのは、6世紀の出来事である。クロティルデと女子修道院長はずっと以前から争っており、上の引用部分はその争いの中のひとこまである。

ここに登場する女装の男は実は子どものときに病気にかかり、睾丸を切り取られていたので、仕方なく女装して女子修道院に入っていたのであり、トゥールのグレゴリウスの筆からは、女装すること自体が悪であるとの思いは伝わっては来ない。しかしクロティルデによる告発は、女装することによって男子禁制の修道院に入り込んでいるのは女との戯れが目的であったとの思い込みからであり、当時、女装がもっていたイメージを我々に知らせてくれる。

女との性的戯れと女装との緊密な結びつきはヒエロニムス伝説の場合にも見て取れる。ヒエロニムスは382年から385年の8月までローマにいた。このときには教皇ダマス1世の秘書として活躍したらしい。ダマスが384年12月11日に死去すると、彼の地位は危うくなった。彼による手厳しい批判がたくさんの敵を生じさせており、彼らがヒエロニムスを破滅させようとしたとカトリック百科辞典は書く。⁴ とにかく教皇の死後数ヶ月でヒエロニムスはローマを去らねばならなかった。この突然のローマ退去に関して後年の伝記作家たちが想像を膨らませた。ライスによると、ヒエロニムス自身は「ある人たちがあらゆる種類の犯罪の廉で私を非難した」と書いているだけであるが、9世紀中ごろ、『我がヒエ

ロニムス』の著者は、自分たちの悪徳を批判された聖職者がヒエロニムスに復讐しようとしたと書いているそうである。彼らが「畏」を仕掛けたというのだが、のちにはこの「畏」が女の衣服であると考えられるようになった。⁵ 『黄金伝説』では次のように記されている。

ヒエロニムスは、39歳のとき、ローマ教会で司祭枢機卿に叙せられた。その後リベリウス教皇が死ぬと、彼は、一致して教皇に選ばれた。⁶ しかし、不心得な修道士や聖職者たちの行状をきびしく咎めたので、彼らは、これを根にもって、ヒエロニムスに畏をしかけた。ヨハネス・ベレットによると、女の着物を使って彼に赤恥をかかせたのである。ある日、彼がいつものように早朝のミサのために起きると、ベッドの横に女の服が置いてあった。彼をねたむ連中が置いておいたのである。しかし、彼は、自分の服だとおもってそれを着ると、教会に出かけていった。彼が自分の部屋に女を泊めたと人々に信じさせようとして、敵どもがたくらんだ策略であった。⁷

ヒエロニムスの場合、彼の名声を引き下げようとする企ての一環として女装が使われたのであり、ヒエロニムス自身が女装を意図したわけではない。しかし女装がそれとして不道徳的であったというよりは、不道徳的な行為と密接に結びついていると観念されていたがゆえの企みであり、その伝説化は不道徳の対極に位置していたヒエロニムスの聖性をより高めるためのものであった。

2 同性愛と結びつく女装

前項では女に近づく手段としての女装を扱ったが、女装は男に近づく手段でもありえ

る。女装して売春を行っていた人物が捕えられ、尋問されたものが残されているので、それを紹介する。⁸

リチャード2世治世18年12月11日、ここロンドンの市長ジョン・フレッシュならびにロンドンの長老参事会員たちの前に、ヨーク州のジョン・ブリドビならびにエレノアと称し、婦人の衣服を着て発見されたジョン・リキナーが連行された。彼らは先週の日曜日の夜間8時から9時の間に、上述の市(ロンドン市)の何人かの役人によって、ソウバズレインと呼ばれる小路のとある厩において横になり、かの忌まわしく、罰当たりで、不名誉な悪徳を犯しているところを見つけられ、上述の市長と長老参事会員たちの前に、行われたこと、そして聞かれるべきことなどについて別々に尋問されるために(連れてこられた)確かにジョン・ブリドビはそのことについて語り、次のように自白した。彼は日曜日の上記時間にチープのハイロードを通過していた際、女の服装をしていた上述のジョン・リキナーに女だと思って声をかけ、あたかも女に(行くか)のように彼に自分(=ジョン・ブリドビ)が彼女とみだらなことを行い得るかとなぜねた。ジョン・リキナーはその仕事のために金銭を要求して同意し、彼らは連れ立ってその行為を行うべく、前述の厩へと赴いた。しかしながらそのときその場で厭うべき悪事の最中に上述の役人たちによって逮捕され、確かに市の獄に今までいた、等々。そして上述のジョン・リキナーがここに女の服装のまま連行され、上述のことについて語り、同ジョン・ブリドビが先に自白したのと同じように自分もすべて行つたと認めた、等々。さらに前述のジョン・リキナーに尋ねられた。

誰が彼に上述の悪徳を行うことを教えたか、またどれほどの間、どのような場所で、どのような男もしくは女と、かのみだらで嫌悪すべき行為を犯していたか、と。彼は自発的に魂にかけて誓い、次のように認めた。トマス・プロウント殿一家の、かつては娼婦であったアンナ某⁹が最初に女のやり方でのこの嫌悪すべき悪徳そのものを行うことを教えた、と。さらに彼は言った。エリザベス・プロウデラ某がそれより以前に彼に女の服を着せた。彼女はまた自分の娘であるアリス某を快樂のためとてさまざまな男のもとに連れゆき、彼女自身をその男たちとともに夜の間明けりがないところで彼らのベッドにとどませ、彼女を朝早く彼らのもとから退出させた。そして女の服装をさせ、エレノアと呼ばれた前述のジョン・リキナーを彼らに示すことによって、彼らが彼女(=ジョン・リキナー)と不品行なことをやらかしたと主張した、と。彼はさらに言った。タイドン・ゲルノンの地方役人¹⁰、フィリップス某がビショップスゲイトの外側にある同エリザベス・プロウデラの家で、女と(交わるごとく)同ジョン・リキナーと交わり、そのとき上述のジョン・リキナーはフィリップス自身の二着のトーガ¹¹を持ち去った、と。そして同フィリップスが前述のジョン・リキナーに、それらを返してくれと頼んだとき、かれ自身が、自分はある男の妻であり、もしも彼がそれらを返して欲しいと望むならば、自分の夫に彼(=フィリップス)を訴えさせることにするとも言った。さらに上述のジョン・リキナーは自白した。ミカエル祭の前5週間にわたって、彼はオクスフォードにとどまり、同地で女装してエレノアと称し、刺繍工として働いた。そして同地の湿地帯において、¹² 3名の見ず知ら

ずの学者たち 彼らのうちひとり、ウィリアム・フォクスリ殿、もうひとり、ジョン殿、そして三番目はウォルター殿 が彼自身と上述の嫌悪すべき悪徳をたびたび行つた。さらに前述のジョン・リキナーは自白した。上述の聖マイケル祭のすぐ前の金曜日、彼はオクスフォード州のパーフォードへとやって来た、と。そして次なる6週間、給仕として、ジョン・クラーク・アット・スワン某のもとに留まり、その間に、ふたりのフランスコ修道会士たち ひとり、名前をブラザー・マイケル、もうひとり、金の指輪を与えてくれた人でブラザー・ジョン・バリと呼ばれていた およびひとりのカルメル修道会士、そして6名のさまざまな外国の男たちが彼と上述の悪徳を犯した。確かに前述の修道会士や男たちのうちある者は上述のジョン・リキナーに12ペンスを、ある者は20ペンスを、そしてある者は2シリングを与えた。さらに同ジョン・リキナーは自白した。彼はビーコンスフィールドに滞在し、同地でさらに、男が性交する如く、ジョン・マシュの娘、ジョーン某と（性交した）、そしてさらに同地で外国出身のふたりのフランスコ修道会士が、彼と、女と性交する如く（性交した）と。さらに上述のジョン・リキナーは自白した。最後にロンドンに戻ってきた後、かつて聖マーガレット・パッテンス教会の礼拝堂付き司祭であったジョン某殿と、他のもう二人の礼拝堂付き司祭が、ロンドン塔のそばの聖キャサリン教会の奥の小道で、かの者（＝ジョン・リキナー）と上述の悪徳を犯した、と。さらに上述のジョン・リキナーは言った。彼自身、しばしば男が（性交）するように、多くの尼僧と性交し、そしてまた男のやり方で、既婚であろうと、そうでなから

うと、多くの婦人と性交したが、その数を（彼は）知らない、と。さらに上述のジョン・リキナーは自白した。多くの司祭が、女とするように、彼とかの悪徳を犯したが、その数を（彼は）知らない、と。そして言った。（司祭たちは）他の人よりも、彼にたくさん与えようとするので、他の人たちより、司祭たちをより頻繁につかまえた、と。

上の尋問調書はさまざまなことを我々に教えてくれる。リチャード2世治世の第18年と言えば、1394年であり、イギリスは百年戦争のちょうど中間あたりの時期であった。リチャード2世はエドワード黒太子の息子である。彼は、黒太子の父、つまり祖父のエドワード3世の死去に伴い、1377年に即位した。シェイクスピアの史劇、『リチャード2世』の主人公である。

さて、リキナーが女装したのは、尋問調書によると、アリスが夜間男たちと褥をとにしたのち、彼女の身代わりとして男たちの前に姿を現すためであった。おそらく彼女の身元が割れることに不都合があったのであろう。リキナーは女装すれば、女としても通用するような容貌であり、体格であったと思われる。この点については、オックスフォードで女工として働いていたという彼の供述からも裏付けられる。

彼が女装しても十分に女であると見なされると考えたアンナ某が女装して売春するすべをリキナーに教え、その結果、ジョン・ブリトビとの「仕事」中に逮捕されたという状況であった。従ってジョン・ブリトビとリキナーの逮捕は同性愛容疑ではなく、単に売春行為のためであったと想像される。逮捕した後、同性愛行為と判明したのであろう。¹³ 尋

問調書からは、同性愛に対する非難の声は聞こえてくるものの、彼が女装していたことに対しては、なんら非難の論調はない。同性愛的売春のための単なる手段として認識されていたようである。もちろん犯罪のための扮装であるから容認されているわけではないが、女装自体に対しての非難というのは、この尋問調書からは読み取れない。男が女装すること自体に問題があるとされるなら、捕まった時点でリキナーは女装をやめるようにと申し渡され、男の服に着替えさせられていたであろう。このときより30数年後に登場するジャンヌ・ダルクの場合はそうであった。しかしこの尋問調書を読む限り、そのような配慮はない。男の女装自体、犯罪とのかかわりで非難されることはあっても、それ自体への非難は世俗法廷では見られなかったのではないかと想像される。

不思議なのは、地方役人であったフィリップスとの一件である。ここではフィリップスがリキナーと交わったことが、*concumbo*という単語を使って表現される。この単語は、「同衾する、交接する」の意味である。リキナーがフィリップスに対して、自分はある男の妻だと言い立てていることを見れば、フィリップスは彼が女であることを疑ってはいないということであろう。もしかしたらリキナーは男であることを気取られずに、相手を喜ばせる何らかの手段を持っていたのかもしれない。

尋問調書によれば、リキナーは男との売春の場合には金銭を得ているが、女との交情の場合金銭を介在させているようには見えない。また女と関係する際には、「男のやり方で」と書かれており、リキナーに何らかの欠陥があったようには思えない。普通の男として女

に接していたようなのである。

フランシスコ修道会士や司祭たちとの交渉の際には、彼らの行為に関して、わざわざ「女と性交するように」などという言葉が書かれている。これはおそらく司祭たちとの行為において、リキナーが受動的な同性愛行為を行っていたことを強調するためであったのだろう。尋問調書を書いた者がこのように受動的同性愛行為と能動的同性愛行為の相違を強調しているのは、おそらく尋問者および書記官の意識の中で同じく同性愛的な行為であっても受動的な場合と能動的な場合で罪の軽重が異なっていたからであろう。

3 演じる

中世世界でおそらく男による女装が唯一公然と認められていたのは演劇という場においてであろう。一般的に舞台上では、女の役は成人の男ではなく少年によって演じられた。メッツの理髪師の徒弟が聖パルバラを演じたところ、そのしぐさや容姿に感動したある未亡人がその少年を引き取って、自分の相続人に指定した。残念ながら少年は翌年には声変わりをしている、舞台上では女を演じることができなくなり、聖職者になるべくパリへと旅立った。プーローが紹介している例である。¹⁴

しかし舞台とはなんの関係もない女装もある。それについてはブランディジが興味深い事例を提供してくれている。「キプロス島の騎士たちが女の服装で、トーナメント(=馬上武術試合大会)を闘ったとの記事がある。そしてこれは奇妙なこととして取り扱われはしたが、犯罪とは考えられなかった。」¹⁵ その顛末については、原史料が入手し得ないので、何ともいえないが、もしこれが事実とすれば、不思議なことである。騎士は中世においては

力の象徴であり、「男らしさ」の象徴であったからである。その騎士たちが何ゆえ女装したのか。以下、騎士の女装を取り上げながら、女装と男装の相違について考えてみたい。

最初の例は、実際にあった話である。1286年、イエルサレム王の戴冠式が行われたが、そのときの祝宴のひとつとしてトーナメントが開かれた。その様子をフィリップ・ド・ナヴァールが描写している。

祝宴はこの百年間に開かれたどんな宴会やトーナメントよりも美しかった。彼らは「円卓」を、女の支配を真似た。騎士たちは女装をし、そして互いに馬上槍試合をしたのだ。ついで、彼らは尼僧に扮し、僧を伴い、互いに馬上槍試合をした。そして彼らはランスロットやトリスタンやパルメデを演じ、多くのその他の愉快で、すばらしくて、楽しげなゲームに興じたのだった。¹⁶

以上の叙述からは楽しげな雰囲気は伝わってくるものの、女による男装のような悲壮感や微塵もない。女による男装においては、それが暴かれることがとりもなおさず人生における失敗と見なされる状況であるのに対し、騎士たちの女装においては、自分が男であることをなんら隠してはいないという点に大きな相違がある。男が女に扮すること、さらには尼僧にすら扮することは単に冗談であり、その扮しているということ自体を男たちが楽しんでいたのである。

上記引用中の「女の支配を真似た」については説明が必要だろう。これは中近世期によく見られた祝祭空間における性的逆転劇を茶化したものであり、「支配する女」をパロディー化したものに他ならない。こうするこ

とによって性的逆転劇のもっていた現状批判が完全に抜き去られてしまっている。まさにトーナメントが男のための男の行為であることを象徴的に示しているのである。なお「女の支配」については、ナタリー・Z・デーヴィスの『支配する女』という秀逸な論文があるので、参照願いたい。¹⁷

男が女性化することに対する批判があったことはオルデリクス・ウィタリスから知られる。¹⁸ 昔の男はもっと男らしかったが、最近の男はめめしいという批判が語られているからである。しかし騎士による女装について言えば、女装した騎士がめめしくなるというようには受け取られてはいなかった。その逆に、女装することは男らしさを強調することになったようである。ただしそれは女装することを本人が決めたときのことであり、他人に強いられた場合にはこの限りではない。『マーリンの予言』なる物語中のディナーデンがその例を提供してくれる。¹⁹ これは事実ではなく文学的な創作ではあるが、当時の人々が強いられた女装をどのように考えていたかを教えてくれる。

ディナーデンに侮辱されたランスロットは仕返しのため女に扮し、あたかもトーナメントの褒賞としての貴婦人であるかのごとく試合場に現れた。そしてディナーデンのほうに早足で進み、簡単に彼を打ち負かしてしまう。落馬したディナーデンには無理やり女の服が着せられ、彼は女の服装のまま広間に戻らねばならなかった。

こうしてディナーデンは完全に面目を失うのである。ここでの論理に従えば、女による男装が軽蔑されるのも、それが強いられるからだということになる。たとえば修道院に入って神に仕えたいと思えば男装するしか

い。それしかないというありようは、そうせざるを得ないということであり、自らの発意といえど、強いられる状況には変わりはないのだ。

トーナメントでの女装が許されたのは、フラデーデンバーグによると、トーナメントが演劇として見られていたからである。トーナメントの扮装は宮中舞踏会のマスクと同じだといふのだ。²⁰ トーナメントの際、さまざまな扮装がなされたり、他の騎士の甲冑を身につけて闘ったりする場合があるが、それによって自分を隠そうという意識はない。あくまでもその場限りでの仮装にしか過ぎないのである。トーナメントにおいて、騎士が女装しようと、僧侶の扮装で現れようと、それは単に演じられているだけだとみなされており、実際は外見とは違うということをして全体的に人たちが知っていたのである。外見と実質がまったく異なるとの前提が存在していたのである。要するに単なる冗談にしかすぎなかったのだ。ディナーデンが名誉を失ったのは、外見＝女と実質＝ひ弱が一致してしまったからに他ならない。彼の場合、演劇性が喪失してしまっているのである。

バイエルンの騎士、ウルリヒ・フォン・リーヒテンシュタインが『女性への奉仕』という自伝風の物語詩を書いている。²¹ ウルリヒは中世騎士の典型のような人物で、ある高位の女性にあこがれ、彼女の歡心を得るために馬上槍試合を行いながら旅をする。そうした馬上槍試合行のひとつに、彼が「ヴィーナスの旅」と呼んだ旅があった。このとき彼はヴィーナスに扮して旅をした。女装しての旅である。

先に馬上槍試合が演劇であったことを指摘しておいたが、ウルリヒは女装があくまでも

演劇的でないこと、つまりそれを見るものが実際は彼が男であると知っている状況にはなかったことをまず読者に知らせる。たとえば、ヴィーナスが男であると分からないように、誰にもその顔や手を見せないし、声もかけない。さらに厚いベールで顔を覆い、²² 手には手袋をつける²³ という念を入れたやり方で、あくまでも自分が女であると、彼を見るものに信じさせようとしているかのごとく書く。こうした彼の工夫は、自分の女装を演劇として理解してもらいたくないという自己主張につながる。逆に言えば、当時、騎士が女装すれば、それだけで演劇として、つまり遊びとして理解されたということの意味する。

では彼はなぜここまで非演劇としての女装にこだわったのか。以下、彼の主観に即して推測してみる。彼が書いているところによると、²⁴ 彼は12歳のとき、ある貴婦人に恋をした。そして彼女の愛を得ようと、さまざまな努力を重ねることになる。やがて彼は彼女の宮廷の小姓となり、彼女に近づく機会を得る。花を集め、それを貴婦人に手渡し、貴婦人がその茎を持ったのを見て、自分が触れたものと同じものに貴婦人が触れていると感動し、貴婦人が手を洗った水をそっと手に入れ、それをすべて飲み干して、貴婦人との一体化を想う。²⁵ これほど恋焦がれた貴婦人のために行われたのがこの「ヴィーナスの旅」であった。この「ヴィーナスの旅」によって、彼はどうしてもこの貴婦人の愛を獲得したかったのである。もちろんこの場合の愛は象徴的なものである。彼はこの貴婦人と結ばれたいなどとは考えていない。この「ヴィーナスの旅」の最中に妻を登場させているのも、彼が得たかった貴婦人の愛とは、そのような俗なものではないということを示唆したかったからか

もしれない。

さて、このような彼の熱い想いを背景にして、この「ヴィーナスの旅」を読むならば、ふたつのことが明らかになる。ひとつは、彼はこの中であくまでもヒーローだという点である。とにかく試合という試合に勝利するのであり、彼が折った相手側の槍が全部で307本というのであるから、²⁶ その意味では彼はとても男らしいのである。もうひとつの点は、彼が女装する際にはまったく恥ずかしさを感じていない、むしろ女性用の衣服をあつらえるときからして、女装することがある種の儀礼と化しているかのようなのである。では、なにゆえ彼は女装を儀礼として採用するのか。

サー・フィリップ・シドニーの『アーケイディア』に出てくるパイロクリーズはフィロクレアという王女に近づくため女装をする。この変装がめめしいと非難されたパイロクリーズは、愛するものを真似るのは愛の本性になかったことであるし、もともと女は美德の持ち主であるから、女を真似ることが悪徳であるはずがないと抗弁する。²⁷ もちろんシドニーは16世紀の作家であり、ウルリヒとは何の関係もない。時代も300年以上隔たっている。ところがまさにこれとよく似た言葉をウルリヒ自身が書き残しているのである。かれは次のように書く。「あなたが愛を込めて女性の衣服をまとい、そのことによって女性を顕彰したことに、あらゆるところの婦人はすべて感謝すべきです。」²⁸ これはウルリヒ自身が言った言葉ではなく、ウルリヒに女性用の服を贈ってくれたなぞの人物のメッセージの中にあつた言葉であるが、その時代の考え方を示したものと考えてもいいだろう。こうした観念は、特殊なものというよりも、女性が美德を体現しているという宮廷ロマンの中

から出てきた、騎士層にあつては一般的な観念なのだろう。ただし、これは現実の女に対する観念ではなく、あくまでも理想の貴婦人に対する態度であつたことを忘れてはならない。さらに彼がヴィーナスに扮することは、彼があがめてやまないその貴婦人を美そのものを体現していたヴィーナスに喩えることにほかならず、そこに恥ずかしさが生じるはずもない。

しかしながら以上の想像はあくまでも彼の主観に即してのものである。彼がそのように理解してもらいたいと願っているように理解したに過ぎない。

実際は、彼が男であることは、彼の従者たちがみな知っていることであり、彼が女を演じているのであれば、彼がどのように願おうと、彼の周りにいた人々からは演劇として理解されているのである。そうであるからこそ、彼が男であると知ってしまった女ですら、それを許容するのである。²⁹

ウルリヒの演劇空間は、もちろん馬上槍試合の場であるが、それ以外のときにも演劇空間は持続する。彼は、あるとき馬上槍試合から帰ったあと、

私はよろいを全部脱ぎ、
女の衣服を着し、帽子をかぶって、
バルコニーに座っていた。³⁰

もちろん休むためではなく、見られるために座っていたのだ。馬上槍試合に続く私的空間までも演劇空間に取り込まれているのである。とりわけ、ウルリヒは、教会をその荘厳さではなく、笑いの添え物として対象化する。たとえばフィラハに投宿したときのことであ

我々がいたフィラハの部屋はとても気持ちいいもので私は喜んだ。

夜明けに私はミサを聞いて朝の時間をすごすため宿屋を後にした。

女の服を、もちろん最上の服を着て。

私はたいそう陽気そうに教会に入っていったが、
多くの人たちが私を見て笑わざるを得なかった。³¹

教会がステージとなり、そして女装のウルリヒは、一種の道化を演じているわけである。次の箇所も、一種の道化劇ととれないことはない。

私は彼女たちがこのように私のほうに近づいてくるのを見た。

待っているのは上品ではないだろう、だから私はおだやかにそして陽気なしぐさで近づいた。

そして女たちはみんな微笑み、

私はとても陽気に歩いた。

かわいい女の服を着て、キュートなお下げを腰まで垂らして。

私はたくさんの笑っている唇に会った。³²

たくさんの女が舞台上に登場し、我らが主人公ウルリヒを迎える。皆が笑いさざめき、それを見た観衆たちも楽しげに笑っているという趣向であろうか。こうした叙述は「ヴィーナスの旅」を演劇としてではなく、ひとつの儀礼として理解させようとするウルリヒの願望にもかかわらず、まさに彼の「ヴィーナスの旅」全体が壮大な演劇空間であったことを示しているのである。

4 女装と男装

女による男装の事例は、かなりの頻度で見つかるが、男による女装の事例はきわめて少ない。この事例の数の非対称性が女装と男装の意味の違いを象徴的に示している。この非対称性は衣服を着ること自体に対する評価の場合にも、顕著に現れてくる。女の場合、いままでの議論で示してきたように、男の衣服を着ること自体が罪であった。しかし、男が女装する場合、女装することでなされる悪事が罪であったのであり、女の衣服を着ることは罪とは考えられてはいなかったようなのだ。

男装は、神に仕えるための修行のためであれ、修道士として修道院に入るためであれ、あるいは騎士になるためであれ、より良き目的を目指してのひとつの手段であった。男であれば可能であったことが、女であるために不可能とされたがゆえに、次善の策として、つまり男にはなれないので、せめて男装することにより、仮の男としてより良き目的を追求しようとしたのだ。

彼女たちの男装は秩序を毀損するとして、非難の対象になりはしたが、しかし彼女たちには既存秩序を否定するつもりなどまったくなく、女には拒絶されていた体制の中に何とか入り込もうという願いを持っていたがゆえに、最終的には体制＝男によって許容されたのだ。女教皇ジョーンが許容されなかったのは、男にしか登位が許されなかった教皇になったがゆえであり、女装のせいではなかった。

別の見方をすると、男装は、男たちのほうに女が擦り寄ってくるという感覚であるかもしれない。それゆえ女を受け入れるか否かの決定は完全に男の側にある。つまり既存の秩

序を前提にしつつ、女をその秩序の中に入れるか、あるいはそれから排除するかは男の問題なのだ。

しかし女装は違う。女装の場合、とりわけ冗談としての女装以外の場合には、既存の秩序が真っ向から否定されるのである。既存の秩序からの逸脱は、犯罪とされ、社会的に葬り去られる。男装の場合、男中心秩序への入り込みによって男女を分けている宇宙秩序が侵犯されるとの見方はあっても、秩序壊乱とは見られてはいない。これは現代においても基本的には変わっていない。男装者が精神医学的に問題を抱えているとは一般的には考えられないが、女装者は、たいていの場合、変質者として分類されるか、あるいは精神障害者としてくられがちである。男装の女が聖人とされることがなんら不思議には感じられないのに対し、女装の男が聖人となるなど想像できないのである。

いったいなにゆえ男装と女装はここまで非対称的なのであろうか。もちろん社会における男と女のありようの違いがある。存在のありよう自体が非対称的なのである。言い換えれば男らしさと女らしさという、他者からのまなざしが、非対称的な価値を有しているからなのである。通常、女に対して「お美しい」という形容詞が使われることはほとんどないし、女が「お美しい」と言われるように努力することなどありえないが、男は常に「めめしい」と言われぬように努力する。もちろん男に対して「めめしい」という言葉が投げかけられたら、悪口である。恥じ入らなければならないのだ。フラーデンバーグは「めめしさは、男が子供のように振舞うとき、女の服を着るとき、容貌に気を配るとき」³³と表現する。では、なぜ騎士が女装してめめしい

と言われなかったのか。なぜある空間が演劇空間だということで女装が許容されるのであろうか。

演劇空間における女装は、あくまでも冗談であり、遊びであった。それも高みにあるものが低きに降りてくるという趣向の冗談であった。天上にあるものが人間を演じ、貴族が乞食を演じるの類であり、それは、低きものを許容するその寛容さのゆえに、高きにあるものを賞賛することであって、非難することではない。王者の戯れなのだ。男装によって女は男になろうとするが、演劇空間での女装は、男が女を演じようとしているだけなのだ。女が男を演じることは、可能性としてはありえるが、しかし中世においては、演劇空間ですら、女が男を演じることは、きわめて少ない。低きにある女が、高きにある男を演じることすら、許されなかったという印象なのだ。

女が女であるためには、他に何も必要はない。女であればいいのだ。しかし男が男であるためには、できるだけ女であるありようから遠くにあるように努力しなければならない。その結果、男であること自体、女であることから遠く隔たっていることになる。ただしその隔たりは水平ではなく、垂直なのだ。そうであるがゆえ、女装と男装とは意味が異なるのである。女が男装するときには、女は男になるのだ。トマスによる福音書では、女は救われるためには男にならねばならないとされていたし、³⁴ ヒエロニムスも「女が俗世間以上にキリストに仕えたいと望むときには、そのときには彼女は女であることをやめ、男と呼ばれるだろう」³⁵と言い、特殊な場合に限定してではあるが、女が男になることを認めているのである。しかし女に近づくための女

装も、騎士の女装も、男が女になることを意味しない。男は男のままなのである。演劇空間における女装も同様である。男は女を演じるが、女になることはない。例外があるとすれば、同性愛の場合である。女装しての同性愛は、男が女になると見なされる。これは許しがたいことであっただろう。リキナーの尋問調書が残されたのは、事態のそのような重大性によるのではなかったか。

おわりに

男であることと女であることは、何ゆえこうまで非対称的なのであろうか。社会における役割の非対称性が男らしさと女らしさに非対称性を付加することになったのであろうか。あるいは、男らしさと女らしさというありよう自体が、また別の原因からつくられているのであろうか。女らしさは男がつくった枠組みである。では、男らしさは女がつくった枠組みなのであろうか。現在では男らしさの枠組みは女がつくるといっていいかもしれない。しかし中世世界ではどうであったか。男らしさという観念形成に女は入り込む余地はなかったのであろうか。西洋の中世世界においては、男らしさというものはどのようにして形成されたのであろうか。次には、この問題を考察して、異性装を通しての男と女の関係論の締めくくりをしたい。

注

1 「女は男の着物を身に着けてはならない。男は女の着物を着てはならない。このようなことをする者をすべて、あなたの神、主はいとわれる。」(新共同訳『申命記』22-5) なお、この申命記における異性装の禁止は、習俗としての異性装を道徳

的に禁じたものではないというのが一般的な説明である。D.F.ペインは、この規定に関して、「(異性の服を着る) 服装倒錯として知られる軽度の性的異常行為とは無関係であり、その時代の異教の或る宗教的慣習を拒絶するものと考えるのが妥当である」(D.F.ペイン著 丸橋裕訳『申命記』新教出版社 1997年、225頁)としているし、最新の旧約聖書注解でも、この規定は、「単に衣装をめぐる文化的な慣習の是非を言うものではなく、儀礼的な背景があるために禁止事項に加えられたことは明らか。ローマ時代のシリアにあった異教の儀礼的慣習の中に、男女が衣服を替えて身に着けるものがあったという。またカナン土着の儀礼にも同じものがあったとしばしば想定されている。だが、異教の慣習を排除するというこの規定の意図も、同化政策の一環として理解することができる」(『新共同訳 旧約聖書注解』日本基督教団出版局 1993年、338頁)とされている。異教にたいする防波堤としての異性装禁止はキリスト教にも残される。たとえば、スペインのシロスにおいて作られた贖罪規定書に次のような規定が見られる。「踊りの際に、女の衣服を着、奇妙なやりかたでその着衣を飾る者は、そしてあごの骨や弓や鋤、その他それに類似するものを使う者は、1年間の贖罪を行うべし。」(John T. MacNeill, Helena M. Gamler, *Medieval Handbooks of Penance*, Columbia University Press, 1990, p.289.)

- 2 Sarah Roche-Mahdi, *Silence—A Thirteenth—Century French Romance*, Michigan State University Press, 1992, P.307.
- 3 兼岩正夫・臺幸夫訳『トゥールのグレゴリウス 歴史十巻』 東海大学出版局 昭和50年。第10巻15章、457、459頁。
- 4 筆者が使用したのは、C D - R O M版のカトリック百科辞典である。Catholic Encyclopedia, ISBN 0-9743644-0-1 (Copyright 1907-1922 by Robert Appleton Company and the Encyclopedia Press, Inc. Computer edition copyright 2003 by Kevin Knight.)
- 5 Eugene F.Rice, Jr., *Saint Jerome in the Renaissance*, The Johns Hopkins University Press, 1985,

- p.28.
- 6 リベリウス教皇が死んだのは366年であり、そのころ、ヒエロニムスは39歳ではなく、まだ24歳から26歳ぐらいであっただろう。また彼は教皇には選ばれていない。
 - 7 ヤコブス・デ・ウォラギネ 前田敬作 山中知子訳『黄金伝説 4』人文書院 1987年、15頁。
 - 8 ラテン語原文は、Document. Corporation of London Records Office, Plea and Memoranda Roll A34, m.2(1395)なるタイトルのもとに、*GLQ*, Vol.1, pp.461-462に載せられており、pp.462-463にその英語訳も載せられている。英訳したのは、Ruth Mazo Karras とDavid Lorenzo Boydである。
 - 9 Karrasたちの訳では、「サー・トマス・ブロウントのかつての召使で、娼婦であるアンナ某」となっているが、召使であったかどうかは、原文からはわからない。
 - 10 Rector de Theydon Gernonをこう訳した。
 - 11 Karrasたちの訳ではガウンであるが、ここではおそらくコートであろう。
 - 12 原文は、in mariscoである。mariscusは沼地であるが、沼地の中で性行為ができるはずもなく、具体的には不明。おそらく沼地の中の家か、あるいはそのようなものをさしているのであろう。
 - 13 ただし売春は女がするものとの固定観念があり、リキナーが男であったため、これがいかなる犯罪であるか確定できなかったようである。そのためリキナーの犯罪は売春としては告発されていない。Ruth Mazo Karras and David Lorenzo Boyd, "Ut cum muliere. A Male Transvestite Prostitute in Fourteenth-Century London." *Premodern Sexualities*, edited by Louise Fradenburg and Carla Freccero, New York: Routledge, 1996, p.105.
 - 14 Vern L.Bullough, "On Being a Male in the Middle Ages, Medieval Masculinities." *Regarding Men in the Middle Ages*, edited by Clare A.Lees, University of Minnesota Press, 1994, p.36.
 - 15 James A.Brundage, *Law, Sex, and Christian Society in Medieval Europe*. The University of Chicago Press, 1987, p.473.
 - 16 Ad Putter, "Transvestite Knights in Medieval Life and Literature." *Becoming Male in the Middle Ages*, Garland Publishing, 2000, p.283
 - 17 ナタリー・Z・デーヴィス著 成瀬駒男・宮下志郎・高橋由美子訳『愚者の王国 異端の都市』平凡社 1987年、所収。
 - 18 *The Ecclesiastical History of Ordericus Vitalis*, edited and translated by Marjorie Chibnall, Clarendon Press, 1973, vol.iv, p.189.
 - 19 Putter, *op.cit.*, p.285f.
 - 20 Louise Olga Fradenburg, *City, Marriage, Tournament: Arts of Rule in Late Medieval Scotland*, University of Wisconsin Press, c.1991, p.192.
 - 21 Ulrich von Liechtenstein, *Service of Ladies*, translated by J.W.Thomas, The Boydell Press, 2004.
 - 22 Liechtenstein. *op.cit.*, p.59. 530連。
 - 23 Liechtenstein. *op.cit.*, p.59. 531連。
 - 24 Liechtenstein. *op.cit.*, p.3f. 12連以下。
 - 25 Liechtenstein. *op.cit.*, p.5. 24連、25連。この行為自体、化体説を思わせるが、それとの直接的な関係があるかどうかは不明である。
 - 26 Liechtenstein. *op.cit.*, p.xi.
 - 27 スティーブン・オーゲル著 岩崎宗治 / 橋本恵訳『性を装う シャイクスピア・異性装・ジェンダー』名古屋大学出版会 1999年 104頁。
 - 28 Liechtenstein. *op.cit.*, p.72. 604連。
 - 29 Liechtenstein. *op.cit.*, p.60. 538連。
 - 30 Liechtenstein. *op.cit.*, p.73. 611連。
 - 31 Liechtenstein. *op.cit.*, p.71. 600連。
 - 32 Liechtenstein. *op.cit.*, p.107. 933連。
 - 33 Fradenburg, *op.cit.*, p.213
 - 34 荒井献『トマスによる福音書』講談社学術文庫 1994年、286頁。
 - 35 Vern L. Bullough/Bonnie Bullough, *Cross Dressing, Sex, and Gender*, University of Pennsylvania Press, 1993, p.50.